

## 巻頭言：EFL から ELF へと移る時に向けて

秋田英語英文学会会長 佐々木 雅子

EFL (= English as a Foreign Language 外国語としての英語)として、日本の英語教育は展開されてきました。EFL を至極当然のこととして、これまでは受け入れてきました。しかし、ここに来て加速するグローバル化と高度情報通信ネットワーク社会への移行により、日本社会における英語の位置付が実質的に変化してきていると感じる機会が多くなりました。その変化を受けて、学校における英語科教育や一般における英語学習がとるアプローチも急速かつ確実に変容を遂げてきています。有効なアプリの活用が英語科教育で実践されることが普通のこととなり、さらには機械翻訳の使用をどのように扱うかが議論されている今、DX がもたらす変化の速さと英語教育への影響は脅威的でさえあります。さらに、英語が世界共通語として使用される頻度が日常でも高まる昨今、英語教育は最終的には ELF (= English as a Lingua Franca 共通語としての英語) という概念の下で展開されていくのではないのでしょうか。異なる言語を使用する人々が集まる多言語環境において英語を使う場面が多くなり、その実態を反映して英語科教育も英語学習も変化し続けていくことになるでしょう。変化が速い時代において、英語使用の実態が、英語教育はかくあるべきだという概念を、軽々と越えていきそうにさえ感じます。英語は ELF だと実感することが多い人ほど、ELF としての英語教育への移行について具体的に考え実践に移していくと予想されます。

英語教育はグローバル化における人材育成の機能も持ち得ます。言葉に打たれるということがあります。緒方貞子氏（1927～2019 1991～2000 国連難民高等弁務官）が、「国際社会における日本」について次のように語った時、まさに打たれた思いがしました。「日本が貢献するのはここにいる日本から、外になんかすることを国際貢献。日本が全体の中にいないんですよね。だからその participation とかね、日本も国際的な社会の一員だとかね、そういうふうには考えない。」(ETV2002「国境を越えて生きる若いあなたへ～緒方貞子からのメッセージ～」より) 20 年経過した今でも、日本はあまり変わっていないような気がします。国際社会の participants として、英語を ELF として臆せず使用する人材を育成できる英語教育が望まれていることを再認識します。

秋田英語英文学会においても、日本が国際社会の対岸にいるのではなく一員と実感できるように、ELF への移行を視野に入れた研究や教育の成果と課題を具体的に発信していきたいと思えます。今号収録の研究や教育も、ELF への移行への兆しを感じさせるものとなっております。皆様と意見交換できることを楽しみにしております。